

リディヤ人気投票1位記念SS

『花束』

「——どう？」

「正門が開きました。リディヤ御嬢様、御戻りです」

王国王都、リンスター公爵家御屋敷の外庭。

公爵家メイド隊の一員たる私は双眼鏡から目を外し、先輩へ報告しました。
当然、二人共樹木に潜んだまま。

御嬢様へ気づかれないよう、どうしても小声になってしまいます。

先輩は私の報告に頷き、落ち着いた様子で耳の通信宝珠に触れました。

「メイド長、此方、外庭第七分班。リディヤ御嬢様の御姿を視認。御一人です」

『了解です〜♪ 御苦労様。皆、玄関へ』

リンスター公爵家メイド長のアンナ様からの指示が聞こえました。

その間も私達の敬愛する御嬢様——リディヤ・リンスタール公女殿下は通路を進まれています。

長く美しい紅髪が月光を吸い込み、幻想的……ドキドキしてしまいます。

服装は、滅多にお召しにならない白のワンピースと極々淡い黄のケープ。頭にはリボン付きの白い布帽子。

第一王女殿下付き護衛官という重職に就かれているリディヤ御嬢様は、本日、久方ぶりのお休みを取られ、メイド隊の認識では『想い人』であられるアレン様と半日一緒に過ごされたのです。

——両手に持たれているのは、紅のリボンで結ばれた小さな愛らしい花束。

御嬢様は花束を顔に近づけ、柔らかく、とてもとても幸せそうに微笑まれています。

凜とした『劍姫』としての御姿も気高く、神々しいのですが……私は思わず賛嘆を零してしまいます。

「リディヤ御嬢様、お綺麗です……まるで、小説に出てくるお姫様みたい……」

「——全面同意するけれど、そろそろ私達も撤収するわよ」

「! ……は、はいっ」

先輩の言葉に私は意識を戻し、頷きました。

二人で静かに、御屋敷への撤収を開始します。

——リンスター公爵家のメイドたるもの、御嬢様への御挨拶を欠かすことなど、出来よう筈ありませんから！

「リディヤ御嬢様、御帰りなさいませ♪」

『お帰りなさいませっ！』

玄関に整列した私達は、アンナ様の声の後にリディヤ御嬢様へ唱和しました。

すると、御嬢様は普段通りの淡々とした声でお答えになられます。

「……ただいま、アンナ。こういうの一々しなくて良い、って言ってるでしょう？ 皆、

仕事があるのだし。もう夜じゃない。ああ、夕食は済ませてきたから」

「私達はメイドでございますので♪ こうして、お迎えするのが喜びなのです！ 夕食に

ついては、そうだと思っておりました☆」

「……なら、いいけど。貴女達、アンナに強制されていない？ 嫌だったら言うのよ？」

御嬢様は帽子をメイド長へお渡しになりながら、整列している私達にも話を向けてこられました。

なんて、なんて、お優しい御言葉！

王立学校入学前の、他者に対して心を閉ざされていた御嬢様を知る者達は、思わず涙ぐんでしまいます。

これも、全てあの御方の——アレン様のお陰です！

アンナ様が少しだけ意地悪な御顔になりました。

「リディヤ御嬢様、私は強制なぞ致しません★——ところで、その可愛らしい花束はどうされたのですか？」

御嬢様は何でもないかのように告げられます。

「——……夕食の帰りに、バザールで移民の子から買ったのよ」

「ふむふむく？ ああ！ 奥様への贈り物でございますね？ では、そちらもお預かりします。さぞ、お喜びなるかと♪」

「……………」

メイド長の言葉を受け、御嬢様は無言で花束を背へ隠されました。

拗ねた表情で小さく頭を振られ、早口で呟かれます、

「…………こ、これは、あ、あいつが『明日もきちんと頑張るリディヤ・リンスター公女殿下

に』って、買ってくれた花束だから、ダメ……」

か、可愛い……可愛過ぎますっ！

私は隣の先輩へ、左拳を下から向けました。すぐさま右拳を合わせてくれます。

想いは一つ！

メイド長も、ますます笑みを深められました。

「はい♪ では、御部屋に花瓶をお持ち致しますね☆」

「……………紅茶もお願い」

頬を薄っすらと染められたリディア御嬢様は、平静を装い歩きだされました。

御着替えをお手伝いするメイド達もすかさず動き出します。

——御嬢様の御姿が見えなくなった後、残された私達が喝采を上げたのは言うまでもありません。

あのような御顔を見られる限り、リンスター公爵家メイド隊はアレン様へ忠誠を誓い続けるでしょう。

その晩——御部屋に生けられた花束を、頬杖をつき指で触れながら、愛おしそうに見つめられるリディア御嬢様の御姿を、紅茶を届ける際偶々覗いてしまった先輩が、

『メイドになつて良かった……』

という書き置きを残され、数日お休みされたのはまた別の話。